

# 第二性としての独在性

Peirce と永井均

Jimmy Aames

芝浦工業大学

asonosakan@gmail.com

アメリカ哲学フォーラム第 10 回大会 2023/11/04

# Outline

- 1 Introduction
- 2 永井氏の独在性の哲学
- 3 Peirce の第二性の概念
- 4 第二性としての独在性

# Introduction

- 永井均氏の哲学の中心概念である「独在性」と、Charles S. Peirce が提唱する普遍的カテゴリーの一つである「第二性」(Secondness) との間には顕著な類似性がある
- どちらも、事象内容の違いとしては決して現れない「**端的な現実性**」にかかわる概念である
- しかし、不思議なことに、Peirce と永井氏の哲学との間のようなこうした繋がりを探る試みはこれまでなされていない
- 両者の対話からどのような新たな哲学的知見を引き出せるか？

# 永井氏の独在性の哲学

- 「世界にいるたくさんの人の中に、私である（という例外的なあり方をした）人が含まれている、とはいったいどういうことなのか？」（永井均「問題の基本構造の解説」『〈私〉の哲学をアップデートする』 p. 6）
- 私とは、世界がそこから開けている唯一の原点であり、その意味で「例外的なあり方」をしている
- たくさんいる人のそれぞれは、各自にとって「私」であるが、現に世界がそこから開けている原点はこの私だけである  
→ これを〈私〉と表記する

# 現実性と事象内容の独立性

- たくさんいる「私」のうちどれが〈私〉であるか、あるいはそもそも〈私〉が存在するかどうかは、世界の内容（事象内容）とは完全に独立である
- 仮に〈私〉が存在しなかったとしても——つまり世界がそこから開けている原点が存在しなかったとしても——世界の内容にはいかなる影響も及ぼさない
- 「〈私〉は世界に実在する寄与成分ではない」（永井均『世界の独在論的存在構造』 p. 22）
- 〈私〉が存在するとは、世界が現に存在するということに他ならない → 「無内包の現実性」

## 〈私〉と〈今〉の類比性

- 〈今〉も〈私〉と同様の構造を持っている
- 〈私〉が、たくさんいる人のうち、世界がそこから開けている唯一の特殊な人物であるのと類比的に、〈今〉は、たくさんある時点のうち、世界がそこから開けている唯一の特殊な時点である
- 重要な違いは、だれが〈私〉であるかは変わらないが、どの時点が〈今〉であるかは刻一刻と変わっていく点である

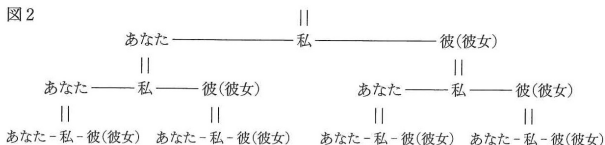
# 語り得ないことについて語るという矛盾

- 世界がそこから開けている原点であるのはこの〈私〉だけだから、そうではない他者に、このことを伝えるのは不可能であるように思われる
- しかし実際は、〈私〉という存在の例外性について、言語によって他人に伝達することができるし、理解されることもある（そこで理解されていることは、もとの発言者の意図を必然的に裏切っているにもかかわらず）
- これはいかにして可能なのだろうか？

## 累進構造



(以下同様)



(以下同様)

Figure: 現実性とその平準化をもたらす累進構造 (永井均 『存在と時間』  
p. 50 より)



# Peirce のカテゴリー論

- Peirce の生涯を通して、彼の哲学全体の中核を成すのが「カテゴリー論」である
- 第一性 (Firstness) : 質, 情感, 偶然, 潜在性, 可能性
- 第二性 (Secondness) : 作用・反作用, 反発, 抵抗, 現実性
- 第三性 (Thirdness) : 法則, 連続性, 媒介, 代表 (representation), 習慣化, 必然性

# カテゴリー論の変遷

- 初期：「新しいカテゴリー表について」 (“On a New List of Categories,” 1867) → カテゴリーは「**普遍的概念**」
- 中期：「一，二，三：思考と自然の根源的カテゴリー」 (“One, Two, Three: Fundamental Categories of Thought and of Nature,” 1885), 「謎を解き当てる」 (“A Guess at the Riddle,” 1887–88) → カテゴリーは概念ではなく思考の最も基本的な要素であり，自然界にも遍在 (**カテゴリーの存在論的転回**)
- 後期：カテゴリーを得る手法として「現象学」 (phenomenology/phaneroscopy) を考案 (1900年代)

## 「第二性」概念の出現

Peirce に特徴的な第二性の概念は、1880年代半ばに初めて出現する。特に重要なのは、「アメリカのプラトン：ロイス『哲学の宗教的側面』書評」(“An American Plato: Review of Royce’s *Religious Aspect of Philosophy*,” EP 1, Sel. 17, 1885) での議論である

指標記号 (index) の無内包性：

“[T]he *index*, [...] like a pointing finger, exercises a real physiological *force* over the attention, like the power of a mesmerizer, and directs it to a particular object of sense.” (EP 1:232)

“[T]he *index*, which in point of fact alone can designate the subject of a proposition, designates it without implying any characters at all.” (*Ibid.*)

## 意志あるいは「外的衝突」としての第二性

“One instant of time is, in itself, exactly like any other instant, one point of space like any other point; nevertheless dates and positions can be approximately distinguished. And how are they so distinguished? By *intuition* says Kant [...] But I should prefer to say that it is by volitional acts that dates and positions are distinguished.” (EP 1:232–33)

“[T]hat strong, clear, and voluntary consciousness in which we act upon our muscles is nothing more than the most marked variety of a kind of consciousness which enters into many other phenomena of our life, a consciousness of duality or dual consciousness.” (EP 1:233)

“The capital error of Hegel which permeates his whole system in every part of it is that he almost altogether ignores the Outward Clash [...] [T]his direct consciousness of hitting and of getting hit enters into all cognition and serves to make it mean something real.” (*Ibid.*)

# 「このものの性」としての第二性

1887–88 年の「謎を解き当てる」では、第二性は「このものの性」(haecceity) と結び付けられ、偶然性 (第一性) と並んで説明不可能な事柄として特徴づけられる

“[A]ny fact is in one sense ultimate,—that is to say, in its isolated aggressive stubbornness and individual reality. What Scotus calls the haecceities of things, the hereness and nowness of them, is indeed ultimate.” (EP 1:274–75)

“Why IT, independently of its general characters, comes to have any definite place in the world, is not a question to be asked; it is simply an ultimate fact.” (EP 1:275)

“Indeterminacy, then, or pure Firstness, and haecceity, or pure Secondness, are facts not calling for and not capable of explanation. Indeterminacy affords us nothing to ask a question about; haecceity is the *ultima ratio*, the brutal fact that will not be questioned.” (*Ibid.*)

# 現実性のカテゴリーとしての第二性

- 1890年代以降、Peirce はカテゴリーの様相的側面を強調するようになる。第一性は可能性、第二性は現実性、第三性は必然性に対応する
- なぜ第二性は現実性のカテゴリーなのか？ → 現実存在するものの特徴は、意志に反発することだから

“[A]n individual is something which reacts. That is to say, it does react against some things, and is of such a nature that it might react, or have reacted, against my will.” (“Individual,” in *Baldwin’s Dictionary of Philosophy and Psychology*, CP 3.613, 1901)

“The thisness of [existence] consists in its reacting upon the consciousness and crowding out other possibilities from so reacting.” (“Abstracts of 8 Lectures,” NEM 4:135, 1898)

# 第二性としての独在性

- Peirce と永井氏の議論を共通の土壌に乗せることで何が見えてくるか？
- 第二性とは「事物と事実の端的な現実性 (Brute Actuality)」(EP 2:435, 1908) に他ならない
- 永井氏の論じる〈私〉や〈今〉の独在性は、第二性の一つの顕現形態と見なすことができる
- もちろん、現実性をカテゴリーとすることは、それを一般化し（その端的性を取り払い）、任意の「私」や「今」において成立するものに転化することである
- しかし、現実性を理解する方法は他にない。なぜなら、「ものごとの理解の基本形式」に収まらないことこそが、端的な現実性の特徴だから（『世界の独在論的存在構造』第9章）

# ① 端的な現実性は一般化を逃れる

- 〈私〉という存在の例外性について、なぜ他人に言語で伝達することができるのか？
- Peirce のカテゴリー論の観点から言えば、この伝達を可能にするのは言語というよりは、**第三性**の働きである
- 何かを理解するとは、それを一般的なものの特殊なケースとして包摂することである。そうすることで、その何かは、他のものとの**関係**のネットワークの中に埋め込まれる
- しかし端的な現実性（第二性）は「一般化に対する積極的な反抗」(NEM 4:136, 1898)であり、一般化を逃れる
- 現実性を一般化することで伝達可能（理解可能）になるが、その過程でその端的さは取り払われてしまっている



## ② 現実性の双対的構造

永井氏の議論では取り上げられないが、Peirce のカテゴリー論で強調される現実性の特徴は、その**双対的構造**である

“The word *individuality* applied to *thisness* involves a one-sided conception of the matter, as if unity and segregation were its characteristic. But this is not so. [...] The true characteristic of *thisness* is duality; and it is only when one member of the pair is considered exclusively that it appears as *individuality*.” (NEM 4:135–36, 1898)

Peirce のカテゴリー論は、彼の関係の論理学や連続性の理論と密接に結びついており、第二性はその双対的構造ゆえに**二項関係**や連続体の「**切断**」としてモデル化される

### ③ 私と他者の連続性

- Peirce は現実性のカテゴリーについて、数学や宇宙論の観点から様々な思索を行っているものの、永井氏のように〈私〉の存在の例外性という観点から考えることはない
- こうした観点は、Peirce が、私と他者は存在のレベルで連続しているという「**連続主義**」(synechism) の立場に立っていたがゆえに欠落していたと考えられる
- 私と他者の連続性を受け入れた場合、独在性はどのように理解すべきか？
- われわれが通常「粒子」とみなしている電子や陽子などは、より根源的には、連続的な量子場の励起状態として理解される。これと同様の仕方で〈私〉を捉えることは可能だろうか？

## ④ 論理的原理と「醒めることを禁じられた夢」

- 現実には「醒めることを禁じられた夢」(永井均 「醒めることを禁じられた夢」『哲学』1990 巻 40 号) のようなものである
- 夢から醒めることはできるが、ある夢が「夢」として明示化された途端、そのさらに外側に「夢」として明示化されない(明示化を逃れる) 現実が立ち上がる
- この事態と、Lewis Carroll のアキレスと亀のパラドックスとの間に類比性がある
- Peirce は、すべての推論には、前提の一つとして明示化しても決して消去できない「論理的原理」(logical principle) が存在すると言う (“On the Natural Classification of Arguments,” W 2:24, 1867; cf. Bellucci 2013)






## ④ 論理的原理と「醒めることを禁じられた夢」

- 論理的原理は、当の推論の中に現れないことによってこそ、その推論を正当化する。しかし亀はその原理の明示化を繰り返して要求し、明示化された原理はその都度推論の中に頹落する → 夢からの覚醒
- それでもなお推論が現に実行されるのは、推論の中には現われない、さらに外側の明示化されない論理的原理が働いているから
- 夢からの覚醒を禁じる力は第二性であり、現実を〈この〉現実たらしめる、有無を言わせぬ透明な強制力とでも呼ぶべきもの。推論においては、論理的原理がこの透明な強制力に相当する

# References I

-  Bellucci, Francesco. 2013. "Peirce's Continuous Predicates." *Transactions of the Charles S. Peirce Society* 49 (2): 178–202.
-  Peirce, Charles S. 1931–1958. *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vols. 1–6, eds. Charles Hartshorne & Paul Weiss (1931–1935); vols. 7 & 8, ed. Arthur W. Burks (1958). Harvard University Press. [CP と略記]
-  Peirce, Charles S. 1976. *The New Elements of Mathematics*, 4 vols., ed. Carolyn Eisele. Mouton. [NEM と略記]
-  Peirce, Charles S. 1982–2009. *Writings of Charles S. Peirce: A Chronological Edition*, ed. Peirce Edition Project. Indiana University Press. [W と略記]

## References II

-  Peirce, Charles S. 1992–1998. *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings* (2 Vols.). Indiana University Press. [EP と略記]
-  永井均. 1990. 「醒めることを禁じられた夢—「現実」の虚構性をめぐる考察」『哲学』1990 (40): 19–35.
-  永井均. 2016. 『存在と時間—哲学探究 1』(文藝春秋)
-  永井均. 2018. 『世界の独在論的存在構造—哲学探究 2』(春秋社)
-  永井均. 2023. 「問題の基本構造の解説」『〈私〉の哲学をアップデートする』(春秋社)